

京滋・紀伊地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討

小原 淳

I. はじめに

筆者は、日本全国に残る日独交流関連の史跡・史実を地域別に提示し、日独関係史の再検討を行おうとしている¹。本稿では、三重県、奈良県、和歌山県、滋賀県、京都府に存する7件の事例を取り上げる。

本研究では、対象を現在のドイツ連邦共和国に属する地域に限定せず、オーストリア、東欧地域、スイス、またドイツ系ロシア人や、アメリカに渡ったドイツ人移民なども扱う。本稿では関連史跡・史実の一覧を最後に掲載し、そのなかでも、史跡の保存状態が比較的良好であること、文字史料が一定程度残されていること、ドイツ史研究・日本史研究者のあいだで詳細がよく知られているとはいいがたく、今後さらなる検証が必要であること、単なる「奇談」の類ではなく、日独関係史の再考に結びつくような問題を含んでいることといった諸要件を満たしているものについて、本文で詳論する。紙幅の都合から史料、参考文献への言及は最小限にとどめる。また、日付は陽暦で表す。

II. 京滋・紀伊地方に存する史跡・史実

(1) 横光利一には見えなかったヨーロッパ²

幼少期の横光利一（1898-1947）は、鉄道技師だった父の仕事の都合で千葉、東京、山梨、広島、滋賀などを転々とした。しかし編集者の車谷弘（1906-78）によれば、母の故郷で、自身も小学校時代を過ごした伊賀の柘植こそが横光にとって最も印象の深い、故郷と呼ぶにふさわしい土地であった。柘植は霧の綺麗な町で、横光が霧を好み、作品のなかで霧を美しく描くのはそのためだという。横光家は利一が11歳の時に大津に引越すが、2年ほどすると柘植から遠くない伊賀上野に移り、利一は三重県立第三中学（現在の上野高校）で中学生時代を過ごした。現在、同校には「横光利一資料展示室」が置かれている。

早稲田大学を中退してから文壇の寵児となった横光は、1936年、『東京日日新聞』の創刊65周年記念の一環で、社友としてベルリン・オリンピック取材した。なお、横光と同じように新聞各社に頼まれてオリンピックの観戦記録を残した人には、『朝日新聞』と『読売新聞』の依頼を受けた西條八十（1892-1970）や、駐ベルリン日本大使の武者小路公共（1882-1962）を兄

にもつ実篤（1885-1976）がいる。

横光はこの時に半年間、ヨーロッパに滞在したが、彼の関心事は西洋文明の探求、そしてその対応物としての日本の探求というところであり、オリンピックに対する情熱はそれほどでもなかった。洋行体験をもとに紀行文『欧洲紀行』（1937-46）、そして長編小説『旅愁』（1937-46）を書いているが、ベルリン・オリンピックについての記述は多くない。

2月20日、川端康成（1899-1972）や中山義秀（1900-69）、画家の佐野繁次郎（1900-87）らに見送られて、横光は神戸を出港した。偶然に高浜虚子（1874-1959）と娘の章子（1919-99）、東洋史家の宮崎市定（1901-95）と同船し、また上海に停泊した際には魯迅（1881-1936）と会って、昼食をともにした。魯迅は翌月から病床に伏せり、10月19日に亡くなっている。

上海出航の翌日に二・二六事件が発生し、翌月7日にはドイツが国際条約を侵してラインラントに進駐するなど、国内外の情勢が揺動するなか、横光は3月27日にマルセイユに到着し、同月28日から7月24日までパリに滞在した。パリでは岡本太郎（1911-96）、歴史家の井上清（1913-2001）、俳優の嵯峨善兵（1909-89）らと交流し、ダダイズムの創始者である詩人ツァラ（Tristan Tzara 1896-1963）を訪問している。

5月3日に総選挙があり、6月4日に人民戦線内閣が成立するなど、この時期はフランスの政情も流動的な状態にあった。6月11日に最高潮に達したゼネストのためにレストランやカフェは軒並み休業状態で、横光は空腹を抱えて市中をさ迷い歩いた。このパリ滞在中に、横光はロンドンに数日滞在した他、ストラスブール、ミュンヘン、チロル、ミッテンヴァルト、インスブ

ルック、ウィーン、ブダペシュト、ヴェネツィア、フィレンツェ、ミラノ、ローザンヌ、ジュネーヴにも足を延ばした。当初はスペインへの旅行も計画していたが、7月17日にスペイン内戦が起こったために、これは断念せざるをえなかった。

7月24日、横光は飛行機でパリを発ち、ベルリンへ向かった。オリンピックの舞台となった都市に到着した日の印象は以下のようなものである。「空巢のやうにさびれた夏のパリーとは違つてここは祭りである。枝低く垂れた菩提樹の間を真直に伸びた磨かれた道、葵の紅い花を咲き誇らせた窓、窓、風に靡く卍の旗の列なつた風景は戦国の昔、どこからか一群の武士が攻め寄せて来るやうだ。人おのおの何の戦争の準備であらうか」³。この数日後、次回の大会開催地が東京に決まったことを知った横光は、「ヨーロッパ各国の視線が同時にこちらを向いたのだ。さて日本人はとわれわれは互に見合うのだが、このベルリンに匹敵する文化をどこから引き摺り出すのか、答えに詰つた顔を撫で廻しているだけだ」と述べており、彼我の文化の差異を気にしている⁴。

8月1日、横光はベルリン西郊のメインスタジアムで行われた開会式を観覧した。以下、横光の印象記に多少の補足を交えつつ、式の模様を再現する⁵。小雨が降るこの日の午後、ベルリン・フィルなどから構成されたオーケストラがワーグナー（Richard Wagner 1813-83）の『ニュルンベルクのマイスタージンガー』やリスト（Franz Liszt 1811-86）の『前奏曲』を演奏し、上空では飛行船「ヒンデンブルク」号がオリンピックの旗をなびかせていた。15時38分に予定通りヒトラー（Adolf Hitler 1889-1945）

が到着し、選手の観閲、第一次世界大戦の戦没者への黙祷を済ませてから、スタジアムに姿を現した。ファンファーレとともにヒトラーが登場すると観衆は総立ちとなり、歓呼の声を挙げながらナチ式の敬礼を行った。

ドイツ国歌の演奏、参加国の国旗掲揚の後、オリンピックの鐘が鳴らされ、各国選手団の入場式が始まった。横光の観察は、とくにこの入場のシーンに関して詳しい。それによれば、行進の際にナチ式の敬礼をした国には拍手と歓声が与えられたが、礼をせずに通り過ぎたイギリスや日本の選手団に対しては、観衆は沈黙した。フランスは総統の前を通過する時に右手を斜めに挙げて礼をして、喝采を浴びた。ただし、フランス選手たちはオリンピック式の挨拶をしたつもりで、観衆はこれをナチ式敬礼と誤解したようである。横光はさらに、たった一人の選手団だったために観客の好意を集めたコスタリカ、旗手がかけ声を発しつつ旗を高く放り投げてみせたスイス、一斉に夏帽子を脱帽した優雅な中華民国、堂々たるイタリア、足並みを揃えてしんがりを務めたドイツといったふうに各国の様子を描写している。日本選手団は列の後半が乱れ、踏んではいけない芝生を踏んで行進していたことも指摘するが、「民族を異にした全体が、一つの興奮にまき込まれながらも、各々の好みに従って歓呼し、拍手するヨーロッパの態度を、この時まのあたりに見ることが出来たと思ふ」というのが、横光の感想である。開会式はその後、組織委員長レーヴァルト（Theodor Lewald 1860-1947）の式辞、ヒトラーの開会の辞、号砲、数千羽の鳩の飛翔、そしてギリシャのオリンピアからリレーで運ばれてきた聖火の点灯、シュトラウス（Richard Strauss 1864-1949）

が作曲したオリンピック讃歌の斉唱と続いて、幕を閉じた。

しかし、オリンピックに対する横光の興味はこれ以上続かなかった。早くも開会式の翌日には、「日本選手の成績が悪いのでこれを文章に書く気がしない。書け書けと喧しい新聞社の催促を受けるが、ペンを持つ気さらになし」とこぼし、疲れて頭が回らないと言って、夜の女の集まるカフェに足を運んでいる⁶。8月6日には帰国を考え始め、帰路をアメリカ経由にするかソ連経由にするか迷った末、後者のルートを選んだ。出国の前日に、「ヨーロッパも今日一日で最後になるのだ。しかし飽きたといふことは恐ろしい。私は何の未練もも早やヨーロッパには感じない。私はヨーロッパを知ったか知らぬか反問さえもしないのだ」と書いていることからすると⁷、オリンピックにだけでなく、ヨーロッパに飽きていたようである。8月11日、横光はベルリンを発った。ソ連国境を越えてモスクワに向かう車中、食堂車でジッド（André Gide 1869-1951）を見かけている。

8月25日、横光は下関に到着した。翌日の『東京日日新聞』の夕刊に、「オリムピツクの感激は今更いふまでもないがあらゆる点で民族的な差別観念がなかつたのは嬉しく思つた、第十二回オリムピツクを東京で開催すると日本の文化は物質的にも精神的も十年は飛躍すると思ふ」と書いているが⁸、オリンピック開催中にナチの人種的偏見が隠蔽されていたことを見抜けなかったのは問わないとしても、大して感激してもいないのに「オリムピツクの感激」を語り、「ベルリンに匹敵する文化をどこから引き摺り出すのか」見当もつかなかったはずなのに、オリンピック開催による日本文化の飛躍を予想す

るのは、いかにも投げやりである。

その後の横光が国粹主義と日本賛美、大東亜戦争の肯定へと傾斜していったことは周知のとおりである。吉本隆明（1924-2012）は横光の日本回帰の契機を1936年の洋行に求め、ヨーロッパ体験を経て、「存在しえない『日本』という原理をヨーロッパとその原型としてのギリシアに対置させようとし」、「原理的な無のうえで現代ヨーロッパの全重量を個人の肩に背負い込もうとし」、「手当たり次第に対比しうる伝統的な素材をかきあつめて俄づくりの原理をつくりあげようとした」ことに、横光の「悲劇」を見ている。鋭敏な感覚をもつ横光が、もしベルリンをもっと真剣に観察していたならば、「原型としてのギリシア」を演出の材料に用い、人種主義イデオロギーをひた隠し、「平和の祭典」と並行してスペイン内戦に介入したナチ・オリンピックの空虚と欺瞞を見抜いたのではないか。そして、「現代ヨーロッパの全重量」を幾分かは差し引いて感じることはできたのではないか。「悲劇」の一端は、ベルリン・オリンピックが「俄づくり」で表現したヨーロッパを「見なかったこと」にあるのかもしれない。

(2) 1929年ベルリンの十字路*

生涯に約120本の映画作品を制作し、『地獄門』（1953）で第7回カンヌ国際映画祭のグランプリを受賞した衣笠貞之助（小亀貞之助、1896-1982）は、三重県亀山町大字東町（現在の亀山市本町）で煙草元売捌業者の家に生まれた。兄の衡一（1885-?）は1936～40年に亀山町長を務めている。どのような偶然か、小津安二郎（1903-63）、市川崑（1915-2008）、藤田敏八（1932-97）、高畑勲（1935-2018）、呉美保（1977-）

など、三重にゆかりのある映画人は多い。

衣笠は芝居好きの母の影響で役者を志し、18歳で新派の女形となった。牧野省三（1878-1929）との出会いがきっかけで映画監督に転身し、1920年に『妹の死』で監督デビューを果たす。1925年、『日輪』を映画化したことで2歳年少の原著者、横光利一との交流が始まり、翌年にマキノ映画製作所を離れ、横光や川端康成、片岡鉄兵（1894-1944）、池谷信三郎（1900-33）、岸田国士（1890-1954）らと新感覚派映画連盟を結成した。この連盟が制作した最初の作品『狂った一頁』は横光の原作を斬新な技法で映像化して、衣笠の初期の代表作となった。なお衣笠はこの頃、映画を撮るために来日したドイツ人青年「アルデンボーク」——衣笠はフルネームを覚えていない——を居候させている。『狂った一頁』の特殊な技巧に用いられたカメラは、衣笠の言いつけでアルデンボークが上海に向向いて購入したものであり、アルデンボークはこの作品に端役で出演している。

1928年、衣笠は、江戸時代の下町でひっそりと生きる貧しい姉弟の悲劇を描いた『十字路』を製作した。『狂った一頁』と同様にドイツ表現主義の影響を受けたこの作品は、限られた予算や機材を用いて様々な実験的要素を取り込んだ、立ち回りのない時代劇であった。実験的な色彩が強い『十字路』は松竹の映画館での封切とはいわず、洋画館での特別上映となったが、思いもよらず、パリ在住の日本人貿易商から同作のパリ上映の申し出があった。衣笠はこれを好機と考え、『十字路』のヨーロッパでの上映、日本で見られない作品の鑑賞、そして海外の映画人との交流のために、2年間の洋行に出た。

1928年の夏、衣笠はシベリア鉄道でモスクワ

を訪れた。当時のソ連は「西欧と比肩しうる芸術振興の時代であり、美術、音楽、新舞踏と、見るべきものが実にたくさんあった」¹⁰。衣笠は「機会があれば、のがさずそれらを欲ふかく見てまわ」り、エイゼンシュテイン (Sergei Eisenstein 1898-1948) やプドフキン (Vsevolod Pudovkin 1893-1953) と会い、また中條百合子 (宮本百合子、1899-1951) やロシア文学者の湯浅芳子 (1896-1990)、映画監督の亀井文夫 (1908-87) らとも知り合った。エイゼンシュテインとは市川左團次 (1880-1940) のモスクワ公演と一緒に観劇し、『忠臣蔵』を観たエイゼンシュテインが「これこそ、トーキーそのものだと感心し、怒りの感情を、長袴の裾、太鼓の音とで、同時に表現していると、まるで自分のことでもあるかのような喜びようであった」ことを記憶している¹¹。

8月の末頃、衣笠はレニングラード経由でベルリンへ向かった。アルデンボークとの再会を果たし、しばらく同宿させてもらうが、アルデンボークが銀行員としてタイに出向することとなったため、1929年2月、中條や湯浅の知り合いだった演出家・俳優の千田是也 (1904-94) の下宿に移った。フランスでは2月8日～3月21日に『十字路』が上映されており、衣笠は千田の助けも借りて、ドイツでの上映のためにベルリン市内の30以上の配給会社を周った。フリッツ・ラング (Friedrich Lang 1890-1976) やピスカートル (Erwin Piscator 1893-1966) に自作を見せても反応は芳しくなかったが、検閲のために当局にフィルムを提出したところ、思いもよらず「芸術映画」のスタンプを得た。このスタンプがあると興行税が半額になるため、配給会社は一転して『十字路』に飛びつき、ヨーロッ

パ各国への売込みも引き受けてくれることとなった。タイトルはドイツの観客の日本イメージに合わせて『ヨシワラの影』に改題——この改題は、ラングの『メトロポリス』(1927)に登場する未来都市「ヨシワラ」も思い起こさせる——されたが、5月、ノレンドルフ広場のウーファ直営劇場「モーツァルト・ザール」での特別公開が実現する。「外国の常設館で正式に公開された日本の劇映画の第一号」に対して各紙は概ね好意的な評価を下し¹²、同作はイギリス、アメリカ、イタリア、スイス、スウェーデンにも配給された。

その後の映画人生にとっても、ベルリン滞在は有益であった。衣笠が滞在していた頃のベルリンは、1929年3月12日にドイツ初の本格的トーキー『世界のメロディー』が、そして翌年4月1日に『嘆きの天使』が封切られるなど、トーキーへの移行の最中であった。モスクワでエイゼンシュテインと話してトーキーに関心を抱いていた衣笠は、ベルリンのトビス社に通って技術を学び、現地でのトーキー製作を試みている。1930年7月にベルリンを離れ、ソ連をへて翌月に帰国した衣笠は、トーキー専用のステージを松竹下加茂撮影所に造営し、1932年に自身初のトーキー映画『生き残った新撰組』、そしてヒット作の『忠臣蔵』を撮った。

衣笠の訪欧は日本映画史上の重要な一コマであるとともに、ヴァイマル末期の政治状況が鮮明に映し出されたシーンでもある。1920年代後半、ベルリンでは蠟山政道 (1895-1980)、有澤廣巳 (1896-1988)、国崎定洞 (1894-1937) を中心に、堀江邑一 (1896-1991)、谷口吉彦 (1891-1956)、山本勝市 (1896-1986)、舟橋諄一 (1900-96)、菊池勇夫 (1898-1975)、山田勝次郎 (1897-

1982)、松山貞夫(1895?-1968)、岡上守道(黒田礼二、1890-1943)、鈴木東民(1895-1979)、横田喜三郎(1896-1993)、黒田覚(1900-90)、八木芳之助(1895-1944)、土屋喬雄(1896-1988)、与謝野譲(1903-39)、平野義太郎(1897-1980)、蜷川虎三(1897-1981)、工藤一三(1898-1970)、勝野金政(1901-84)、岡田桑三(1903-83)ら日本人留学生が集まって、マルクス主義文献を研究する読書会「ベルリン社会科学研究会」が組織され、衣笠を居候させた千田もこの会に顔を出していた。当初は、週に一度レストランの一室を借りて、日本でははばかりされるような政治談議を思う存分に戦わせたり、共産党や左翼系団体のデモ・集会を見物したり、野球をしたり、中華料理を皆で食べに行ったりといった集まりだったが、1928年夏に国崎、1929年夏に千田がドイツ共産党に入党し、勝本清一郎(1899-1967)、島崎蒨助(1908-92)、藤森成吉(1892-1977)といったプロレタリア文化運動の関係者が合流し、さらに日本で学生運動に関与したことのある若手メンバーが加わったことで、研究会はより政治的で実践的な組織、「ベルリン反帝グループ」へと発展する。国崎や千田、鈴木、平野といった旧メンバーの他に、服部英太郎(1899-1965)、三宅鹿之助(1899-1982)、小林陽之助(1908-42)、小林義雄(1909-95)、岡部福造(1903-35)、喜多村浩(1909-2002)、八木誠三(1909-81)、和井田和雄(1911-58)、安達鶴太郎(1906-89)、嬉野満洲雄(1907-93)、千足高保(1910-80)、川村金一郎(1908-99)、白井晟一(1905-83)、井上角太郎(1900-67)、小栗喬太郎(1906-67)、根本辰(1904-38)、竹谷富士雄(1908-84)、鳥居敏文(1908-2006)、三枝博音(1892-1963)、野村平爾(1902-79)、大野

俊一(1903-80)、大岩誠(1900-57)、佐野碩(1905-66)、土方與志(1898-1959)、岡内順三(1907-53)、二宮秀(1900-71)、山口文象(1902-78)、山西英一(1899-1984)らが参加した同グループは、ドイツ共産党日本人部やドイツ国内の左翼団体のみならず、モスクワの片山潜(1859-1933)や勝野、山本懸蔵(1895-1939)、野坂参三(1892-1993)、日本の河上肇(1879-1946)や野呂榮太郎(1900-34)、岩田義道(1898-1932)、さらにはパリ、ロンドン、ウィーン、ジュネーヴ、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロサンゼルス の同志と繋がって、日本人の左翼知識人の国際的なネットワークを形成した。衣笠は千田を通してこの運動に加わり、帰国後も秋田雨雀(1883-1962)を会長とする「ソヴェート友の会」の発起人となっている。

衣笠はベルリンで仲間を得たばかりでなく、敵対者にも遭遇した。「後年ファッションのリーダーの一人となった有名なK教授」こと鹿子木員信(1884-1949)や、三井のベルリン支店長夫人らを中心とするベルリン日本人会の一部が、衣笠の作品の上映に対して反対運動を起こしたのである。反対派は『ヨシワラの影』と改題された作品を「国辱映画」と決めつけた。「ベルリン最初の日本映画が、ちょんまげ時代の、それもみじめな姉弟の生活のものでは困る、下宿のおばさんや娘さんをつれて行って大恥をかいた」という批判や、「桜咲く日本の美しい景色を併映できないかという調停案(?)」も出て¹³、朝日新聞特派員だった岡上の取り成しで、ようやく反対派は矛を収めた。急先鋒の鹿子木はベルリン大学客員教授で、戦時中に大日本言論報国会の専務理事・事務局長を務めた国粋主義者だが、ドイツの日本文化研究所の設立や日本側

の日独文化協会設立を主導し、日独交流の中心にいた人物でもある。

当時は、ドイツの文化と社会が全面的な分裂へと向かい始めていた時期であった。左翼の側が1928年に映画芸術人民連合、翌年にドイツ独立映画連盟を結成したのに対して、まさに衣笠が千田の下宿に移った1929年2月、ナチ党イデオログのローゼンベルク（Alfred Rosenberg 1893-1946）がドイツ文化闘争連盟を組織して「文化ポリシェヴィズム」との闘いを宣言し、文化をめぐる左右の闘争は深刻の度合いを深めていた。5月1日には共産党が警察の禁止命令を無視してデモを実行し、33名の死者、1228人の逮捕者が出た「血のメーデー事件」が起こる。衣笠が体験したベルリンの日本人社会の分裂は、ドイツ社会全体の動向に並行している。

その後は衣笠の帰国まで、10月3日のシュレーゼマン（Gustav Stresemann 1878-1929）の死、その3週間後に始まった世界大恐慌、年末の反ヤング案闘争、翌年1月14日の突撃隊員ヴェッセル（Horst Wessel 1907-1930）への銃撃事件、3月27日の第二次ミュラー内閣退陣と、共和政の終末を予感させる事件が相次いだ。それでもなお数年間は、共和政末期の闘争がもたらす興奮と緊張は様々な文化的挑戦の原動力となったかもしれない。しかし1933年にナチが政権を獲得すると、闘争は一方的な迫害でしかなくなり、興奮は狂信に、緊張は圧迫に化し、文化は委縮してしまった。

(3) 万葉集とドイツを繋ぐ人びと¹⁴

奈良盆地の東端を南北に続く山の辺の道を歩くと、要所要所で様々な形の万葉歌碑に出会う。これらは1971年に桜井出身の文芸評論家、保

田與重郎（1910-81）の呼びかけで建てられたものである。山辺の道とその周辺の古道に64基が配されており、福田和也の表現を借りれば、「いわゆる歌碑、俳碑のように大仰なものではなく、目だたないように、路傍の草むらの中などにひっそりと、しかし探し出せば驚嘆せざるをえない、いずれも見事な、風景を背後にして置かれている。それらの碑文を辿る時、戦後の保田與重郎を、農本主義等と呼ぶことのつまらなさを実感させられる」¹⁵。碑の揮毫者は中河與一（1897-1994）、小林秀雄（1902-83）、武者小路実篤、佐藤佐太郎（1909-87）、岡潔（1901-78）、棟方志功（1903-75）、川端康成、久松潜一（1894-1976）、徳川宗敬（1897-1989）、安田靱彦（1884-1978）、林房雄（1903-75）、山口誓子（1901-94）、今東光（1898-1977）、有島生馬（有島壬生馬、1882-1974）、樋口清之（1909-97）、平泉澄（1895-1984）、會津八一（1881-1956）、山本健吉（1907-88）、東山魁夷（1908-99）、堂本印象（1891-1975）、黛敏郎（1929-97）、入江泰吉（1905-92）鹿兒島寿蔵（1898-1982）、市原豊太（1902-90）、吉田富三（1903-73）、北岡寿逸（1894-1989）、千玄室（1923-）、月山貞一（1907-95）ら錚々たる顔ぶれで、路程の目安にと思って辿っていくと、一つとして見落とすことができなくなり、時間が足りなくなってしまう。

保田與重郎は、日本の伝統への回帰を唱えて戦前の文壇に存在感を示した日本浪漫派の発起者である。保田が中心となり、亀井勝一郎（1907-66）、中島栄次郎（1910-45）、神保光太郎（1905-90）、中谷孝雄（1901-95）、緒方隆士（1905-38）を創刊同人として結成され、太宰治（1909-48）、檀一雄（1912-76）、中河與一、林房雄、萩原朔太郎（1886-1942）、佐藤春夫（1892-1964）、

三好達治（1900-64）、原民喜（1905-51）たちが名を連ねた日本浪漫派は、周知のように、一方では保田たちの出身地である関西の歴史豊かな風土を精神的な拠りどころとしつつ、しかしもう一方ではドイツの文学や思想、とくに 19 世紀前半のドイツ・ロマン主義から強い影響を受けていた。中心メンバーの保田、亀井、神保、中谷らがドイツの文学や美学を学んだ経験をもっただけでなく、同人の芳賀檀（1903-91）、大山定一（1904-74）、雪山俊夫（1880-1946）、石中象治（1900-81）、常木実（1913-2005）、番匠谷英一（1895-1966）らがドイツ文学を本業としていた同派にとって、ドイツ・ロマン派は外国支配に対する抵抗者、民族統一の先導者であり、プロレタリア文学とリアリズムに代わるべき新たな文学表現の模範であった。日本の伝統や精神を追い求めた日本浪漫派が戦後に厳しく批判されたこと、彼らのなかに芳賀のようなナチ追随者がいたこともよく知られるとおりである。

彼らとは別の立場、別の動機からだが、ドイツ文学と日本の古典文学を結びつけたドイツ人がいる。1889～1914 年に東京帝国大学の独文科で教えたフローレンツ（Karl Florenz 1865-1939）である。エアフルトに生まれ、ライプツィヒ大学でサンスクリット研究で博士号を取得したフローレンツは、ベルリン大学附属東洋語学学校で井上哲次郎（1856-1944）らから日本語を学んだ後、1888 年に来日し、翌年から東京帝大の講師に雇用された。25 年にわたる在任中に菅虎雄（1864-1943）や藤代禎輔（1868-1927）、登張竹風（信一郎、1873-1955）、小宮豊隆（1884-1966）、木村謹治（1889-1948）らを教え、日本の独文学の基礎を築いた教育者であり、その実証主義や

客観主義は国文学研究にも影響を与えた。また多数の著書、訳書を発表して日本文化をドイツに紹介し、ドイツにおける日本学研究の先駆者となった。

大学でのフローレンツの本来の担当はドイツ文学やドイツ語の教育だが、東洋の言語や文学、神話が主たる興味の対象だった彼は、独文科の学生に万葉集の授業を受けに行かせたり、卒論で日本文学に関するテーマをドイツ語で書かせたりしたという。辻册季の研究によれば、フローレンツの学問の根底には西洋の文学理論の優位に対する揺るがざる信念があり、和歌や俳句をドイツの叙情詩の形式に即して独訳したことで上田萬年（1867-1937）の批判を受けたが、西洋至上主義的な態度を変えなかった。ただし、馬場大介の分析によれば、フローレンツの代表作『日本文学史』（1906）は、一方では芳賀檀の父である国文学者の矢一（1867-1927）の『国文学史十講』（1899）などの日本人による日本文学史研究から、他方ではシェーラー（Wilhelm Scherer 1841-86）らのドイツ文学史研究の蓄積から取捨選択した知識や記述を混合、変形させたものであり、ドイツと日本の文化交流が前者から後者への一方的な移植ではなかったことを示しているという。

1914 年 7 月に帰国したフローレンツは、ドイツ初の日本学の教授として、ハンブルク植民地研究所に着任した。8 月 23 日に日本がドイツに宣戦布告し、青島攻撃が始まる前日の 10 月 30 日、フローレンツはハンブルクで「ドイツと日本」と題した講演を行った。同年にパンフレットとして出版されたこの講演において、彼は日本のアジア進出の歴史的連続性を、古代の任那や秀吉の朝鮮出兵に遡って説明し、また近代日

本の国粋主義と対外膨張主義の連関を論じ、日本にとって青島とその周辺地域の獲得は経済面のみならず、歴史や国威、東アジアにおける権益保持といった観点からしても重要な意味を有していると説く。フローレンツは自分を裏切った日本を冒頭で批判しつつも、ドイツから多大なる知的影響を受けた日本の忘恩の原因は、イギリスによる反動的な扇動活動によるところが大きいとして、将来の日独の関係回復への期待を失っていない。

その後のフローレンツは、日本学の大家としての地位を確立していった。勤務先の植民地研究所は1919年にハンブルク大学に昇格し、1925年にフローレンツはゲッティンゲン科学・人文科学アカデミーの会員に選出された。ナチが政権を獲得すると、彼は1933年9月に国民社会主義教員連盟、11月にドイツ官吏全国連盟に加入し、同月の「アードルフ・ヒトラーと国民社会主義国家を支持するドイツ大学教授たちの宣誓」にも署名している。1937年に定年退職したフローレンツは、死没の前年の1938年、ナチズムの信奉者であったオランダの日本学者ピアソン（Jan L. Pierson 1854-1944）と共同で『万葉集』の翻訳を英文で出版した。同書は「善き意志の体現者にして好機をつかむ名手、アードルフ・ヒトラー」に献呈されている。

ナチ党に入党せず、ユダヤ人であるという噂もあったフローレンツは決して積極的なナチ支持者ではなかったとする見解もあるが、単なる保身の行為だったとか、何とは無しの迎合だったとして片づけるには、彼の体制への同調は度を過ぎている。この点はさらなる議論が必要だろう。

来日から半世紀を経て、フローレンツ晩年の

仕事は日本浪漫派の活動期と重なり合っている。フローレンツ個人の意思や心情がどうであったかということを超えて、日独はともに、古典と伝統への志向が非政治的なままではいられない時代の只中にあった。

(4) 日本初の国民皆兵制とその遺産¹⁶

カール・ケッペン（Karl Köppen 1833-1907）は、ドイツ北部のシャウムブルク=リッペ侯国の首都ビュッケブルク市に仕立屋の子として生を享けた。ギムナジウム卒業後に裁判所の書記官を1年勤めた後、1851年に同国のライフル大隊に入隊した。1853年7月に伍長、1859年5月に曹長、さらに特務曹長に昇進したが、1866年6月に普墺戦争が起ると、彼の国はオーストリア側で参戦して敗北を喫する。戦後のシャウムブルク=リッペはプロイセンを盟主に戴く北ドイツ連邦の構成国となり、1867年9月に退役したケッペンは写真業と年金で糊口をしのぐ身となる。

しかし程なく、16年の軍隊生活を経験した34歳の軍人に転機がおとずれる。この頃、大阪川口で諸藩に洋式武器を売っていた貿易商C・レーマン（Carl Lehmann 1831-74）が紀州藩の依頼を受け、最新鋭の後装式ライフルであったドライゼ銃3000挺を用立てるためにケッペンのもとを来訪し、銃砲の知識と経験をもつ彼に和歌山行きの誘いをかけたのである。これに応じたケッペンは、ドライゼ銃とともに1868年12月17日にハンブルクを発ち、翌年6月28日に神戸に到着した。

ケッペンの故郷であるシャウムブルク=リッペは、18世紀後半のヘッセン=カッセル方伯による占領、そしてナポレオン（Napoléon Bonaparte

1769-1821) による占領を耐え、第一次世界大戦に至るまでの近代ドイツ史を生き延びた領邦の一つである。1871年に成立したドイツ帝国でみた場合、自由都市を除けば二番目の小国だったシャウムブルク=リップペは、小なりとも軍事先進国であった。18世紀後半の啓蒙君主ヴィルヘルム伯 (Wilhelm Friedrich Ernst zu Schaumburg-Lippe 1724-77) の治下で、この国は諸邦に先んじて国民皆兵制を敷いた。シュタインフーダー湖に伯が築いたヴィルヘルムシュタイン要塞では軍事学の教育が行われ、プロイセン軍制改革を主導したシャルンホルスト (Gerhard v. Scharnhorst 1755-1813) も、ここに学んだ経験をもつ。

シャウムブルク=リップペには銃の開発に関しても矚目すべきものがある。この時代の銃砲の技術史上の一大変化は、前装式から後装式への転換である。従来の銃は、銃身の先端から銃弾を装填する。その際に、射手は銃口を手元に戻して作業を行う必要があるが、このタイプに代わって19世紀半ばから開発、換装が進められた後装銃は、手元で短時間のうちに、また匍匐前進の状態でも敵の弾丸をかわしながら、銃弾を装填できるようになった。またこれと並行して、銃筒の内側にらせん状の溝をもうけて弾丸に回転運動を与える施条の技術も生み出されたが、こうした新型銃の導入は、アメリカ南北戦争、普墺戦争、そして西南戦争と、この時代の世界各地の戦争の勝敗を左右する要因となった。シャウムブルク=リップペ軍では、1861年に発明された後装式の新型銃ドルッシュ & バウムガルテン銃が採用されており、ケッペンがその製法に関する知識まで備えていたとする見方もある。

他方で当時の日本そして和歌山は、江戸から

明治への大変動の只中にあった。ケッペンがドイツを発った時期は箱館戦争の最中だったが、鳥羽・伏見の戦いで敗走した旧幕軍兵5700人を助けた紀州藩に対する新政府の態度は厳しく、京都警護の勅命を受けた第14代藩主の徳川茂承 (1844-1906) が帰藩したのは、ようやくこの年の12月であった。こうしたなか、1868年11月より藩政改革の全権を委ねられたのは、前年に藩内の政争に巻き込まれて無期限の禁固処分を受けていた36歳の藩士、津田出 (1832-1905) である。津田は藩士の家禄削減、郡県制度の実施など先進的な改革を進めたが、わけても新式兵術、そして士庶皆兵の実現は重要な課題であり、指導者として招かれたケッペンは和歌山の命運を握る存在となった。

和歌山入りしてから早速に改革の先頭に立ったケッペンは、「才能学識に富み能く一切に了達新兵取立士官伝習大小隊連隊操練より土工輻重之事當舎成兵之規律火薬製法器械修造に至るまで通せさるなく自つから手を下して教示伝法」に励んだとされる¹⁷。来藩の頃からつけ始めた日記、そして後年の回想録によれば、特権意識の抜けない武士、軍事の一切に不慣れな庶民を相手に、彼は新兵の身体検査から行進などの基本的な動作の習得、軍装品の制作、兵舎の設営、軍隊学校の設置、軍規の徹底、作戦活動に必要な技術の習得、そして新型銃の操作に至るまで、あらゆる教育を施した。教練が真剣の度合いを増すあまり、言うことを聞かぬ者を木に縛りつけて、下から煙でいぶして罰したことすらあったという。ドイツ人のスタッフも増員され、ケッペンの他に工兵担当としてユリウス (Julius Helm 1840-1922) とアードルフ (Adolf Helm 1843-?) のヘルム兄弟、さらに軍靴などの製造の

ための技術者としてハイトケンパー (Friedrich Heidkaemper 1843-1900) らが加わった。

津田が既に11月に制定していた「交代兵要領」の、「管内人民農工商を不論其子弟當年二十にして無妻之者より可選取事」という原則はケッペン来藩後にさらに一段押し進められた。「交代兵要領」が20歳で配偶者のいない青年男子であれば身分を問わず徴兵の対象とすることを定めていたものの、藩内の各地区の住民数に応じて徴兵者の数を調整していたのに対して、1870年3月1日に新たに制定された「兵賦略則」は、「管内の士農工商之無差別當年二十に相成候者」のすべてを兵士として徴することとした。これによって、和歌山で兵籍に登録された者は1万7565名(1871年)に達した。

ケッペンの活動は間もなく、内外の注目を集めるところとなる。西郷従道(1843-1902)、山田顕義(1844-92)、村田新八(1836-77)の他、アメリカ合衆国公使デ・ロング(Charles E. DeLong 1832-76)やイギリス公使パークス(Harry Parkes 1828-85)、そしてプロイセン公使ブラント(Max v. Brandt 1835-1920)が和歌山を視察に訪れ、ブラントの報告を受けたビスマルク(Otto v. Bismarck-Schönhausen 1815-98)は、ケッペンへの支援を陸軍省に要請するとともに、ヴィルヘルム一世(Wilhelm I. 1797-1888)に上申して、ケッペンを創設間もないドイツ帝国の陸軍少尉に任命するという異例の措置を講じた。勢力拡大を図る列強が固唾をのんで日本の行く末を見守る時局にあって、和歌山藩とケッペンの試みの成否は一辺土の瑣事では済まなかったのである。

しかし、間もなく状況は一変する。1872年2月5日、ドイツへの一時帰国から戻ったケッペ

ンは他のドイツ人とともに解雇された。任を解かれた理由は、ドイツ滞在中の1871年8月に日本で廃藩置県が実施されたことにある。この措置によって和歌山藩は消滅し、独自の軍制改革の途も絶たれたのであった。帰国後のケッペンは生来の放漫がたたって散財し、ブレーメンの路面鉄道会に勤めるなどした後、ノイミュンスターで74歳で没した。一方、和歌山の兵士たちは兵部省の命令により鎮台兵の要員などを例外として解隊され、原籍に戻ることでされた。

しかし、二年余りのケッペンの試行錯誤は水泡に帰したわけではない。ケッペンの指導を受けて改革の先頭に立った藩士たちは後に、津田出が陸軍少将・大蔵少輔・元老院議員、塩路嘉一郎(生没年不詳)が元老院に出仕、鳥尾小弥太(1848-1905)が陸軍中将・子爵、長屋喜弥太(1839-97)が初代和歌山市長、岡本兵四郎(1846-98)が陸軍中将、岡本柳之助(1852-1912)が朝鮮政府の軍事顧問、小松済治(1848-93)が後に司法省民事局長に就任するなど、いずれも各方面で活躍した。また、ケッペンは軍事の指導と並行して軍服や軍靴の製造技術の伝授を行ったが、これらは綿ネルや皮革産業をはじめとするその後の和歌山の地場産業の基礎を成した。頓挫した試みの遺産は大きい。

(5) 性とフォルクと童話のトリアーデ¹⁸

童話作家の巖谷小波(季雄、1870-1933)の一族は代々近江水口藩の藩医を務めた家柄であり、「小波」の号は琵琶湖にちなむとされる。彼の父は医師から転じて太政官大書記官や元老院議員、貴族院議員を務め、明治の三筆の一人に数えられた書家・漢学者の巖谷一六(修、1834-1905)である。同郷者には、日本にペスタロッチ

(Johann H. Pestalozzi 1746-1827) やフレーベル (Friedrich Fröbel 1782-1852) の教育思想を紹介した山県悌三郎 (1859-1940) と五十雄 (1869-1959) の兄弟がいる。

一六の長男の立太郎 (1857-91) は 20 歳の時にフライベルク鉱山大学に入学して、冶金学や鉱山学を学んだ。肺結核にかかって 1881 年に帰国してからは東京大学で教え、全国の鉱山の調査や日本新聞社の創設に関わったが、早逝した。

立太郎が鉱山学の分野に進み、次男の辨二郎 (1861-1934) は書家の日下部鳴鶴 (1838-1922) の家に養子に出て土木技師となったため、三男の小波は家業の医術を継ぐことを期待され、8 歳の時からドイツ語の教育を受けた。小波の家庭教師となったのは、林学者の松野礪 (1846-1908) のドイツ人妻クララ (Clara L. Zitelmann 1853-1941) であった。クララは東京女子師範学校附属幼稚園 (現在のお茶の水女子大学附属幼稚園) の首席保母として、日本にフレーベル教育を導入した教育者であり、音楽教師としても功績を残している¹⁹。幼少期の小波の学習環境は実に恵まれていたと言えよう。

小波が 11 歳になり、神田一ツ橋のドイツ学塾、訓蒙学舎に通っていた頃、ドイツ留学中の立太郎からオットー (Franz Otto、本名は Otto Spamer 1820-86) 編著の『少年少女愛好の童話の宝』(1880) という本が贈られてきた。ライプツィヒの出版業者オットーは 1848/49 年革命に参加したためにトルコに亡命し、帰郷後にシュパーマー出版社を興し、青少年向けの図書の出版で成功した人物である。オットーだけでなくアンデルセン (Hans Christian Andersen 1805-75)、グリム兄弟 (Jacob Grimm 1785-1863, Wilhelm

Grimm 1786-1859)、ペロー (Charles Perrault 1628-1703)、グルントヴィ (Nikolaj F. S. Grundtvig 1783-1872) 等々の作品、そして古今のヨーロッパ各地の民話が収録された『童話の宝』は、シュパーマー社の人気商品だった。

あくまでも語学の勉強のため、ひいては医者になる準備のための贈り物だったが、少し前から文学に興味を抱くようになっていた小波は、むしろメルヘンの世界に心を奪われる。「読めば一層興味を感じて、果は矢も楯もたまらず、廻はらぬ筆で真似もしたくなる。実に僕の処女作中の処女作、即ち一五の年に作った一編は、全くお伽噺だったのである」とは、本人の弁である²⁰。

1885 年に獨逸学協会学校 (現在の獨協中学・高等学校) へ入学し、後のドイツ帝国宰相ミヒャエリス (Georg Michaelis 1857-1936) やスイス出身の宣教師シュピンナー (Wilfried Spinner 1854-1918) に教わるようになってからも、小波の文学熱はやまなかった²¹。彼はついに医学の道を放棄して、1888 年 6 月に硯友社に入る。9 月に学校を卒業し、12 月末から硯友社の雑誌『我楽多文庫』に「隔恋坊」の筆名で、『童話の宝』所収の「鬼車」の翻訳を連載した。この連載は翌年に春陽堂から刊行された。小波が 18 歳の時であった。

「鬼車」の訳出が第一歩となり、小波は若くして日本児童文学の第一人者となる。1891 年 1 月、博文館の「少年文学第一編」として自作の「こがね丸」を公表、9~11 月には『童話の宝』の収録作品を元にした「七羽鳥」を公表、その後は博文社の雑誌『幼年世界』、『少女世界』、『幼年画報』の主筆となり、また、日本や世界の昔話、お伽噺を集めたシリーズを次々と出版

した。こんにち、「桃太郎」や「金太郎」、「浦島太郎」、「花咲爺」などが広く親しまれているのは、小波の力による。さらに、全国を周って児童劇の口演をしたり、唱歌や、水口尋常小学校（現在の水口小学校）をはじめとする各地の学校の校歌を作詞したのも、大きな仕事である。

巖谷小波には、児童文学の世界の外にも功績がある。それは、性科学の分野である。1900年、彼はベルリンの東洋語学学校に日本語教師として赴任し、1902年までドイツに滞在した。その間のことは帰国後の著書『洋行土産』に詳しく述べられているが、同書によれば、1901年に小波は昆虫学者の松村松年（1872-1960）らを通じて性科学の先駆者ヒルシュフェルト（Magnus Hirschfeld 1868-1935）と知り合い、「科学的人道主義委員会」の年報を手渡され、その夏季総会に招待された。ヒルシュフェルトが1897年に創設したこの組織は、性科学の研究、同性愛者の権利擁護、そして同性愛を違法行為と定めたドイツ刑法典第175条の廃止を目的としており、小波が訪れた6月31日の会合には医者、法律家、記者、教員、美術家など約60名が集まっていた。当初は「学者の好奇事業」と思っていた小波は年報を読み、また会に参加して、「その会の目的たるや、只に斯道の研究に止まらず、所謂同性交接家に同情を表し、進んではこの所為に対する、法律上の制裁を除き、彼等に自由を与えんとするにあるを知り、更にその意外に驚いた²²。

さらに、小波は翌年に同会の年報『性的中間段階年報』に「男色—日本における男性同性愛」を書き、日本における男色や少年愛の歴史を紹介した。小波の論文は、オーストリアの民俗者クラウス（Friedrich Krauss 1859-1938）の目に

留まり、彼の性科学研究に影響を与えた。クラウスは南スラヴで民話や俗歌の蒐集を行って多くの著作を残した学者で、ヒルシュフェルトに協力して1908年に『性科学雑誌』の創刊に尽力するなど、性科学の分野にも強い関心を抱いていた。クラウスは日本の性文化にも注目しており、1907年に『信仰、慣習から見た日本人の性生活』を発表したが、訪日経験のない彼は、小波や訪日ドイツ人たちの書いた文献資料、そして『日本性的風俗辞典』を編纂した佐藤紅霞（民雄、1891-1957）の協力によりつつ、この著作を執筆した。クラウスは1913年に研究内容をめぐってベルリンで裁判にかけられ、自身が編集する雑誌『アントロポフィテア—性モラルの発達史のための民俗学的調査と研究年報』も廃刊に追い込まれたが、その後も研究を続け、1931年に『日本人の性生活』の改訂第三版を、さらに佐藤の著書『日本民族の性生活についての論文と調査』をその続刊として出版している。

クラウスや小波の例が示すように、性科学と民俗学、そして児童文学の世界は重なり合っており、そしてこの重なり合いのなかに日独の文化的な交点をも見出すことができる。

(6) 地理学者の一家の物語²³

地政学者ハウスホーファー（Karl Haushofer 1869-1946）は1887年に士官候補生としてバイエルン軍に入隊、1903年に陸軍大学の教官となり、第一次世界大戦中はアルザス=ロレーヌやポーランド、ルーマニアを転戦し、戦後に少将として退役した。1919年にミュンヘン大学に赴任して1939年まで教壇に立ち、教え子にはヘス（Rudolf Heß 1894-1987）がいる。ハウスホーファーは1924～44年に『地政学雑誌』の

編集者を務め、さらに1925年8月からバイエルン放送局のラジオ番組「世界政治月報」を担当した。同番組は1931年9月に終了するが、ナチ政権成立後に復活し、多くのドイツ国民がハウスホーファーの理論にふれる機会となった。

以上の経歴はよく知られるとおりだが、彼は1908年10月に大使館付武官として日本に派遣され、1910年7月までの二年弱を日本で過ごした経験をもつ。妻を伴ってジェノヴァを出港し、4ヶ月をかけて——この時に文学者ツヴァイク(Stefan Zweig 1881-1942)と交友している——日本に到着したハウスホーファーは、東京に7週間滞在してから京都に移る。滞日中の大半を同地で過ごし、泉涌寺法音院に起居した。

この日本での生活、そして往路に海路を選んでイギリスの植民地のグローバルな広がりを感じ、また帰路にシベリア鉄道を使ってイギリス植民地と比肩しうるロシア帝国の巨大さを確認したことは、ハウスホーファーが自身の地政学理論を構築するうえで重要な意味をもった。帰国後の1913年、彼は日本の軍事などをテーマにして博士論文を執筆し、さらに最初の著作『大日本』を出版した。同書はドイツ、ハプスブルク帝国、ロシア、日本の四つの帝国による同盟構築の利を説いており、ここには後年のハウスホーファーの理論、すなわち日本、ドイツ、イタリア、ソ連の提携を中核として、そこに中国、インドを加えた「大陸ブロック」の形成という構想の原型が示されている。1911～44年のハウスホーファーの37冊の著作のうち11冊が日本に、3冊が東アジアに関するものであり、この点からもハウスホーファーの思想形成に日本が与えた影響の大きさが確認できよう。

ハウスホーファーは日本滞在を契機に青木周

蔵(1844-1914)、松岡洋右(1880-1946)に近い窪井義道(1892-1949)、近衛文麿(1891-1945)のブレントラストである昭和研究会のメンバーの亀井貫一郎(1892-1987)、平沼騏一郎(1867-1952)の助言者だった菊池武夫(1875-1955)、駐ドイツ大使の本多熊太郎(1874-1948)、ドイツ駐在武官の遠藤喜一(1891-1944)や大島浩(1886-1975)、経営学者の平井泰太郎(1896-1970)、社会統計学者の財部静治(1881-1940)、ゾルゲ(Richard Sorge 1895-1944)、日本学者のトラウツ(Friedrich M. Trautz 1877-1952)、駐日大使のディルクセン(Herbert v. Dirksen 1882-1955)やオット(Eugen Ott 1889-1977)と交流し、日本に関する情報を得た。また、ハウスホーファーの著作は幾つも日本語に訳出され、日本の学者や軍人、ジャーナリストに影響を与えた。東京女子高等師範学校(現在のお茶の水大学)の飯本信之(1895-1989)らによる日本地政学協会の創設も、ハウスホーファーの理論に対する日本側のレスポンスの一つと言えよう。

時代を下って第一次世界大戦の1920年夏、ハウスホーファーは親しくしていた教え子のヘスとともにナチ党の集會に初めて参加した。それ以来、気鋭の地政学者とナチ党の関係が深まっていく。1923年のミュンヘン一揆の失敗後、ハウスホーファーはランツベルク刑務所に収監されていたヒトラーを8度も訪問し、日本を反ボリシェヴィズム的連帯の協力者と捉えるヒトラーの日本観に影響を及ぼした。さらに息子のアルブレヒト(Albrecht Haushofer 1903-45)もやはり地理学の道に進んでベルリン大学教授となり、父親と同じようにヘスやリッベントロップ(Joachim v. Ribbentrop 1893-1946)の相談役を務め、1938年のミュンヘン会談にも臨席した。

ただし、ヒトラーに対するハウスホーファーの態度にはしばしば優越感がにじみ出しており、ヘスから諫めの手紙が送られたこともあった。ハウスホーファーはヘス、あるいはリップントロップとは緊密な関係を結んだが、バイエルン軍においてははるかに下位の階級にあり、また反知性主義的な性分だったヒトラーと肝胆相照らしあう仲にはなり難かった。このことは、ナチ党との関係についても当てはまる。ハウスホーファーは大学を退職した後も『地政学雑誌』の編集を担当し、また1938～41年に在外ドイツ人連盟の会長に就任して国外ドイツ人子女の教育やドイツ語教育の普及に尽力するなど、ナチ期の知的・政治的分野で一定の存在感を示したが、ナチ党にはついに入党しなかったし、彼の意見が国策にストレートに反映されることもなかった。生活と研究の両面で支援してくれた妻がいわゆる「半ユダヤ人」だったことも、ハウスホーファーと政権の距離が微妙だった一因だろう。

1941年の5月、アルブレヒトの助言を受けたヘスが単独飛行でイギリスに逃亡し、翌月に独ソ戦が始まって大陸ブロック構想が無意味となったことで、ハウスホーファー親子の立場は怪うげになる。そして1944年、ヒトラー暗殺を狙った7月20日事件に連座して息子アルブレヒトが逮捕され、父カールも7月28日にダッハウの強制収容所に送られて、親子の命運は絶たれた。ベルリン・モアビートに囚われたアルブレヒトは、ヒトラー自殺の一週間前の1945年4月23日の夜、現在のベルリン中央駅付近に連行されて、処刑された。

戦後、弟のハインツ（Heinz Haushofer 1906-88）によって、アルブレヒトが80編の詩を書

きとめた12枚の血染めの原稿が『モアビート・ソネット集』の題名で出版された。当初はアメリカ占領軍の協力を得て私家版として印刷され、1946年に一編を削除してベルリンのロータール・ブランファールト社から出されたものが世に出回った。その第34編は、「父」と題されている²⁴。

古い東洋のお伽噺は語る、神の手で封印された夜の海に、邪悪な力をもった霊が閉じ込められていると。

千年に一度のいつか、選ばれし漁師が幸運にもこの縛りを解く。漁師は見つけたものをすぐに海に投げ返しはしないだろう。

父はその役目を仰せつかった。デーモンを封じ込めるかどうか、それは彼の気持ち次第だった。

父は封印を解いた。父には悪の息吹が見えていなかった。悪魔をこの世に放ってしまったのだ。

ハウスホーファー親子の関係は良好だったといわれる。母からユダヤの出自を受け継ぎ、「デーモン」との闘いを選んだ息子は、父の来し方を冷静に捉え、死の直前まで父を思っていたのではないか。なお、この詩集には厳島神社を題材にした「ミヤジマ」や、鎌倉の大仏を詠った「オム・マニ・パドメ・フム」も収録されており、自らもたびたび来日したアルブレヒトの日本への愛着が窺い知れる。

収容所生活を生き延びた父カールはニュルンベルク裁判を免れたが、1946年3月10日、妻とともに自殺した。78歳だった。現在、ベルリンのハイリゲンゼーやシュプレー河畔には反ナチ闘争の犠牲者となった息子の記念碑が建てら

れている。他方、父はナチ・イデオログの一人、有害な似非学問の唱道者として、批判の目を注がれ続けている。

(7) 舞鶴とドイツを結ぶ二つの場所²⁵

舞鶴には、第二次世界大戦中の日独交流に関連した二つの場所がある。

第一は舞鶴引揚記念館で、ここにはシベリア抑留関連の資料が常設展示されている。日本の抑留経験者には、首相を務めた宇野宗佑（1922-98）、政財界に影響力をふるった瀬島龍三（1911-2007）、河豚計画を立案した軍人の安江仙弘（1888-1950）。歌手の三波春夫（1923-2001）や青木光一（1926-）、俳優の三橋達也（1923-2004）、映画監督の三隅研次（1921-75）、作詞家・作曲家では吉田正（1921-98）や上原賢六（1924-80）、丹古晴己（1923-2012）、只野通泰（1923-2015）、米山正夫（1912-85）、ヴァイオリン奏者の黒柳守綱（1908-83）、吉本新喜劇の座長だった平参平（橘高文夫、1916-86）、芸術界では彫刻家の佐藤忠良（1912-2011）、画家の阿部合成（1910-72）、洋画家の香月泰男（1911-74）、舞踏家・研究者の薄井憲二（1924-2017）、文学者・詩人では胡桃沢耕史（1925-94）、石原吉郎（1915-77）、高杉一郎（1908-2008）、長谷川四郎（1909-87）。学者では角田文衛（1913-2008）、上山安敏（1925-）、小川信（1920-2004）、加藤九祚（1922-2016）、スポーツ界では水原茂（1909-82）、柚木進（1920-97）、石井藤吉郎（1924-99）、玉乃海太三郎（三浦朝弘、1923-87）らがいる。

ドイツにも、ソ連に抑留された体験をもつ人は多い。当然と言うべきか、解放後に旧東ドイツの要職に就いた者が目立ち、そうした例としては、国家評議会議長シュトフ（Willi Stoph

1914-99）、外相フィッシャー（Oskar Fischer 1923-2020）、ワルシャワ条約機構軍最高司令官代行・副国防相・国家人民軍参謀総長シュトレレッツ（Fritz Streletz 1926-）、国防次官兼参謀総長ミュラー（Vincenz Müller 1894-1961）、国防相や社会主義統一党中央委員会政治局員を務めたケスラー（Heinz Keßler 1920-2017）、ナチ期の陸軍元帥パウルス（Friedrich Paulus 1890-1957）、文学者フューマン（Franz Fühmann 1922-84）、ベルリン国立歌劇場総監督・東ドイツ文化連盟議長ピシュナー（Hans Pischner 1914-2016）がいる。旧西ドイツでは、連邦軍総監フェルチュ（Friedrich Foertsch 1900-76）、法相や連邦首相府長官などを歴任したエームケ（Horst Ehmke 1927-2017）の名が挙がる。さらに、ビスマルクの曾孫アインジューデル（Heinrich v. Einsiedel 1921-2007）、『大どろぼうホッツェンプロッツ』などの作品で知られる児童文学者プロイスラー（Otfried Preußler 1923-2013）、歴史家のコゼレック（Reinhart Koselleck 1923-2006）やコンツェ（Werner Conze 1910-86）、文学者・翻訳者デーデツイウス（Karl Dedecius 1921-2016）も俘虜生活を生き延びた人びとである。

第二次世界大戦の開戦から1945年9月までにソ連に抑留された日本人捕虜は64万人、対してドイツ人捕虜は239万人にのぼる。日本人が「戦後捕虜」だったのに対して、ドイツ人は「戦時捕虜」であり、死亡率は低く見積もっても15%——日本人捕虜の場合は10%であった——に達し、1943年には50%を越えた。最終的にドイツに帰国できたのは174万人、最後の捕虜がドイツに帰還したのは1958年2月のことである。

ドイツ人捕虜の多くは西部地域に収容された

が、カザフスタンのカラガンダやウラル山脈周辺、ウクライナ、ヴォルガ地方のエラブカ、タンボフ州のマルシヤンスクやラーダなどで、日独の捕虜が接触する機会もあった。日本人帰還者の手記には、監視兵に対して毅然とした態度をとり、ソ連による反ファシズム教育に感化されず、末端の兵士であっても国際法に則って権利を主張するドイツ人捕虜がしばしば登場する。

そうした記録のなかでもとりわけ克明なのが、後に京都大学名誉教授となった仏文学者の後藤敏雄（1915-92）の回想である。独立混成第79旅団第三中隊の初年兵教官として安東（現在は中国の丹東）で敗戦を迎え、ソ連軍に拘束された後藤は、その後3年にわたって抑留された。当初、後藤はシベリア各地の収容所を転々としていたが、バイカル湖とモンゴル国境の間のダバンの収容所でヴォルガ・ドイツ人の女性監督員に出会ったのが、最初の「ドイツ人」との邂逅であった²⁶。過酷な収容所暮らしにあって「監督がうら若い女性……それもロシア人でなくドイツ娘だということが、私達の心にある和やかさを与えていた」²⁷。後藤は彼女たちから「ユダヤ人の歌」を教わり、別れ際は互いに手を振って名残を惜しみあったという。

1946年8月、後藤はウクライナのザポリージャに移送された。七つの分所をもつ第百収容所にはドイツ人、日本人、ハンガリー人、少数のオーストリア人、そしてドイツ系ロシア人である「ルスキー・ネメツ」1万人がいた。後藤が最初に配属された第一分所は1300人の規模で、捕虜による自治的な管理が行われた、彼らが作った噴水や野外劇場、バスケットコートもあった。ドイツ人たちは統率がとれており、食糧の分配、労働の分担、労賃の支給、物資の調達、医療、

娯楽、情報交換、ソ連人看守との交渉、さぼりなど、巧みにこなしていた。彼らはシベリアの日本人捕虜たちと違って、ソ連の思想教育に影響されておらず、いわゆる「民主運動」も起こさなかった。「スターリンの悪口を言うロシア人には数えきれないほど出会ったが、ヒトラーの悪口を言うドイツ人には最後まで一人も出会わなかったのは、まことにもって不思議と言おうか見事と言おうか」と、後藤は感心している²⁸。後藤はさらに、収容所内の複雑な経理を担当させられて神経をすり減らすユダヤ人捕虜、ソ連やドイツに対して複雑な感情を抱くウクライナ人の労働者、日本人に対して親近感を示すハンガリー人捕虜などの様子も観察している。

捕囚という共通の境遇、ソ連という共通の敵の存在によって、日本人とドイツ人が常に協力し合えたわけではない。ドイツ人は「利害関係のない範囲では親切」で、夕食の後などに日本人と話をするのが好んだが、しかし「露骨な民族的優越感を示したり、そのくせ狡猾」な一面もあったという²⁹。「民族的優越感」は抜きにしても、新参者の日本人と食糧や物資を分け合い、閉鎖的な生活空間の幾ばくかを譲らねばならなかったドイツ人に、無条件の友情や親切心を求めるのは無理な話だったであろう。しばらくすると、日独の捕虜は作業やノルマの分担をめぐっていがみ合うようになる。結局、古株で多勢のドイツ人たちの「奸策」によって日本人はソ連の看守から不利な裁定を受け、別の分所に移された。後藤はこの諍いの後も捕虜生活を余儀なくされ、ようやく1948年12月3日に遠州丸で舞鶴に到着、5年半ぶりに日本に帰国した。

舞鶴における日独交流史にまつわる二つ目の場所は、若狭湾に浮かぶ冠島周辺の海底である。

そこには、ドイツ製のUボートが沈んでいる。第二次世界大戦中、独ソ戦によってシベリア経由のルートが絶たれたため、同盟国の日本とドイツは、ドイツ占領下のブレストやロリアン、連合国軍が海上封鎖線を張る大西洋、喜望峰沖の難所「ロアリング・フォーティーズ」、日本が制海権を握るインド洋、マラッカ海峡、そして日本本土を結ぶ海上ルートで通交することになった。このルートを航海して来日した封鎖突破船——日本では「柳船」と呼ばれた——が起こした「横浜港ドイツ軍艦爆発事件」については、別稿で論じた通りである³⁰。

しかし連合国の攻撃によって、この海上航路も次第に航行が難しくなると、水上艦に代わって潜水艦が用いられるようになる。1942年6月～1945年5月に日本から5回、ドイツから4回、イタリアから1回、潜水艦の航行が試みられ、日本からは酸素魚雷、潜水艦自動懸吊装置、キニーネ、錫、生ゴム、タングステン、モリブデンなどの、ドイツからはレーダー装置、ジェットエンジン、そして潜水艦などを運搬しようとした。もっとも、この航行も極めて危険が高く、例えば日本からドイツに派遣された潜水艦の場合、帰還できたのは第二回（1943年6月1日呉出航、12月21日帰国）の伊号第八潜水艦のみであった。

この通交によって日本に譲渡されたのが、若狭湾に沈む潜水艦である。同艦は1943年5月10日にロリアンを出港して8月7日に呉に入港、日本海軍の艦籍に移り、「呂号第五百潜水艦」と改称された。予定では、1944年前半にもう一隻が提供されるはずだったが、同艦は大西洋でアメリカ海軍に撃沈されたため、けっきょく日本に譲られたのは一隻にとどまった。その呂号

第五百潜水艦も訓練に使用されただけで、実戦に投入されないままに終戦を迎え、1946年4月30日、GHQによって海没処分された。呂号第五百潜水艦の船体の残存状態は現在も良好とのことである。なお同じ場所で、日本製の呂号第68潜水艦、伊号第121潜水艦の船体の所在も確認されている。

III. おわりに

本稿は関西の五府県を対象とした。しかし、この地理区分は紙幅の都合に基づく便宜的なものであり、この地域の史跡・史実は大阪や兵庫との、あるいは東海地域などとの繋がりを意識して、より広域的な観点から再論する余地がある。また、今回扱った事例以外にも、『ケルニツシェ・ツァイトウング』の特派員として来日して仏教に帰依したペッツォルト（Bruno Petzold 1873-1949）、ベルリンの日本研究所や京都の独逸文化研究所の初代所長を務め、ボン大学などにコレクションが残るトラウツ、宮津を訪れて『さっさよやっさ』（1911）を書いた文学者ケラーマン（Bernhard Kellermann 1879-1951）など、検討すべきテーマはなおも残されている。それらについては別の機会に論じたい。

[本稿は、2018～22年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「1848～1871年のドイツ系革命家たちの活動とネットワークに関する研究」(課題番号18K01050)の成果の一部である。]

・京滋・紀伊地方に存する日独関係の史跡一覧

史跡名	住所	備考
三重県立上野高等学校 横光利一資料展示室	三重県伊賀市上野丸之内 107	II (1) に関連。
鶴岡市大寶館	山形県鶴岡市馬場町 4-7	II (1) に関連。横光は戦争中に鶴岡に疎開。
横光利一文学顕彰碑	東京都世田谷区代沢 3-5-3 北沢川緑道	II (1) に関連。
「旅愁」文学碑	大分県宇佐市赤尾 光岡城址	II (1) に関連。
武者小路実篤記念館	東京都調布市若葉町 1-8-30	II (1) に関連。
亀山市歴史博物館	三重県亀山市若山町 7-30	II (2) に関連。衣笠貞之助の「故山遠慕」の碑。
近代映画スタジオ発祥の地	東京都墨田区堤通 2-19-1	II (2) に関連。墨田区立桜堤中学校内に説明版。
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館	東京都新宿区西早稲田 1-6	II (2) に関連。
国立映画アーカイブ	東京都中央区京橋 3-7-6	II (2) に関連。
小津安二郎記念碑	三重県津市大門 32-19 津観音	II (2) に関連。
小津安二郎生誕百年記念碑	三重県伊勢市船江 1-1-23	II (2) に関連。
小津安二郎資料室	三重県松阪市愛宕町 2-44	II (2) に関連。
小津監督生誕の地	東京都江東区深川 1-8-8	II (2) に関連。
小津安二郎記念館無芸荘	長野県茅野市北山	II (2) に関連。
市川崑記念室	東京都渋谷区南平台町 18-4	II (2) に関連。
「悲運の革命家国崎定洞ここに生まれる」の碑	熊本県熊本市中央区壺川 1-10-10	II (2) に関連。国崎定洞の生家跡。
桜井市立図書館	奈良県桜井市河西 31	II (3) に関連。郷土資料室に保田に関する展示。
保田與重郎生家	奈良県桜井市桜井 784	II (3) に関連。
万葉歌碑	奈良県	II (3) に関連。山の辺の道などに多数。
鳴瀧の身余堂	京都府京都市右京区太秦三尾町 1-80	II (3) に関連。保田の住居。
亀井勝一郎生誕の地碑	北海道北海道函館市元町 16	II (3) に関連。近隣に亀井勝一郎文学碑（青柳町25）。
奈良県立万葉文化館	奈良県高市郡明日香村飛鳥 10	II (3) に関連。
松永記念館	神奈川県小田原市板橋 941-1	II (3) に関連。中河與一のコレクションを所有。
神保光太郎の詩碑	埼玉県さいたま市南区別所 4-12 別所沼公園	II (3) に関連。園内に立原道造（1914-39）設計のヒヤシンスハウス。
芳賀矢一先生胸像	東京都渋谷区東 4-10-28 國學院大學	II (3) に関連。
カールケッペン寓居之跡	和歌山県和歌山市吹上 1-4	II (4) に関連。
和歌山城	和歌山県和歌山市一番丁 3	II (4) に関連。
和歌山市立博物館	和歌山県和歌山市湊本町 3-2	II (4) に関連。ケッペンに関する展示。
水口歴史民俗資料館 巖谷小波記念室	滋賀県甲賀市水口町水口 5638	II (5) に関連。
巖谷小波の住居跡	東京都港区高輪 4-1-8	II (5) に関連。全国に童話碑・句碑が多数。
久留島武彦記念館	大分県玖珠郡玖珠町森 855	II (5) に関連。
大阪府立国際児童文学館	大阪府東大阪市荒本北 1-2-1	II (5) に関連。
お茶の水女子大学歴史資料館	東京都文京区大塚 2-1-1	II (5) に関連。大学敷地内の園舎は登録有形文化財。
松野記念林	千葉県君津市折木沢 東京大学千葉演習林	II (5) に関連。
泉涌寺法音院	京都府京都市東山区泉涌寺山内町 30 法音院	II (6) に関連。
舞鶴引揚記念館	京都府舞鶴市平 1584	II (7) に関連。
冠島	京都府舞鶴市野原	II (7) に関連。

平和祈念展示資料館	東京都新宿区西新宿 2-6-1 新宿住友ビル 33 階	II (7) に関連。
伊二九潜戦没者慰霊碑	広島県呉市上長迫町 7 長迫公園	II (7) に関連。
海上自衛隊呉史料館(てつのかじら館)	広島県呉市宝町 5 -32	II (7) に関連。大和ミュージアムを併設。
教育参考館	広島県江田島市江田島町	II (7) に関連。
浦頭引揚記念館	長崎県佐世保市針尾北町	II (7) に関連。周辺に「引揚第一歩の地」(針尾北町 978)。
町家「うの家」	滋賀県守山市守山 1-10-2	II (7) に関連。宇野宗佑の生家。近隣に銅像(三宅町)。
三波春夫顕彰碑	新潟県長岡市塚野山	II (7) に関連。併設の「昔ばなしとほたるの館」に展示。
吉田正音楽記念館	茨城県日立市宮田町 5-2-25	II (7) に関連。
香月泰男美術館	山口県長門市三隅中 226	II (7) に関連。
兵庫県立芸術文化センター	兵庫県西宮市高松町 2-22	II (7) に関連。薄井憲二の展示。
函館市文学館	北海道函館市末広町 22-5	II (7) に関連。長谷川四郎の展示。
高松市立中央公園	香川県高松市番町 1-11	II (7) に関連。水原茂と三原脩(1911-84)の像。
博多港引揚記念碑	福岡県福岡市博多区沖浜町 7-1	II (7) に関連。福岡市市民福祉プラザ(中央区荒戸 3-3-39)に展示。
加治木引揚記念碑	鹿児島県始良市加治木町木田 517-1	II (7) に関連。
紀宝町ふるさと資料館「みどりの里」	三重県南牟婁郡紀宝町大里 2887	古畑種基(1891-1975)はドイツなどに留学、法医学を確立。近隣に顕彰碑。
トラウツの墓	和歌山県伊都郡高野町高野山 550 高野山奥の院	
岡田国太郎建立の碑	滋賀県守山市守山 1-9-23	守山出身の軍医・細菌学者の岡田国太郎(1861-1945)はコッホ(Robert Koch 1843-1910)に師事。
琵琶湖国定公園	滋賀県	来日した詩人ダウテンダイ(Max Dauthendey 1867-1918)が短編集『琵琶湖八景』(1911)を執筆。
ベッツォルト夫妻の墓	滋賀県大津市坂本町 もたて山駅	
ワグネル博士顕彰碑	京都府京都市左京区岡崎成勝寺町	近傍の京都市勧業館みやこめっせでスタンバーク(Josef v. Sternberg 1894-1969)が『アナタハン』(1953)を撮影。
同志社大学	京都府京都市上京区	カレッジソング「ワン・パーパス」とイエール大学校歌は「ラインの護り」が原曲。なお、新島襄(1843-90)は二度目の訪独の際に幼少時のヘッセ(Hermann Hesse 1877-1962)と際会。クラーク記念館(1893)はドイツ人建築家ゼール(Richard Seel 1854-1922)の設計、重文。
京都府立医科大学療病院碑	京都府京都市上京区梶井町 465 京都府立医科大学河原町キャンパス	前身の京都府療病院にユンカー・v・ランゲック(Ferdinand A. Junker v. Langeegg 1828-1901?)、ショイベ(Heinrich B. Scheube 1853-1923)が勤務。中京区上樵木町(御池大橋西詰)、青蓮院(東山区粟田口三条坊町 69-1)に「療病院址」の碑。
宮津新浜	京都府宮津市	ケラーマン、スイス人画家ヴァルザー(Karl Walser 1877-1943)が訪問。
神崎煉瓦ホフマン式輪窯	京都府舞鶴市西神崎	ホフマン窯は旧中川煉瓦製造所(滋賀県近江八幡市船木町 59)にも。

註

1. 小原淳「北海道に存するドイツ関連史跡の総合的検討—日独関係史の再検討に向けて」『WASEDA RILAS JOURNAL』8、2020年；同「東北地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』66、2021年；同「関東北部に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学高等研究所紀要』13、2021年；同「関東南部に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『西洋史論叢』42、2021年；同「東海地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『史観』185、2021年；同「北陸地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『WASEDA RILAS JOURNAL』9、2021年；同「東山地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』67、2022年掲載予定；同「大阪府と兵庫県に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学高等研究所紀要』14、2022年掲載予定。
2. 吉本隆明『悲劇の解説』筑摩書房、1979年；保昌正夫編『横光利一全集月報集成』河出書房新社、1988年；栗坪良樹「横光利一のドイツ体験—パリからベルリンへ」『国文学 解釈と教材の研究』35-13、1990年；横光利一『欧洲紀行』講談社、2006年；井上謙、掛野剛史、井上明芳編『横光利一—欧洲との出会い—「欧洲紀行」から「旅愁」へ』東京おうふう、2009年；上村直己『西條八十の見たベルリン五輪』熊本出版文化会館、2012年；中井祐希「横光利一とベルリン・オリンピック」『横光利一研究』16、2018年；Reinhard Rürup (Hg.), *1936: Die Olympischen Spiele und der Nationalsozialismus*, Berlin 1996；Frank Becker, Ralf Schäfer (Hg.), *Sport und Nationalsozialismus*, Göttingen 2016.
3. 『東京日日新聞』1936年7月27日朝刊。
4. 横光利一『欧洲紀行』、7月30日。
5. 『東京日日新聞』1936年8月2日朝刊。
6. 『欧洲紀行』、8月1〜2日。
7. 同上、8月10日。
8. 『東京日日新聞』8月26日夕刊。
9. 川端康成『独影自命』（『川端康成全集』第14巻、新潮社、1970年所収）；衣笠貞之助『わが映画の青春—日本映画史の一側面』中央公論社、1977年；新明正道『ワイマール・ドイツの回想』恒星社厚生閣、1984年；ジークフリート・クラカウアー、丸尾定訳『カリガリからヒトラーへ—ドイツ映画1918-33における集団心理の構造分析』みすず書房、1995年；亀山市歴史博物館編・出版『衣笠貞之助—映画に魅せられた生涯』2003年；葉照子「鹿子木員信における日本精神とナチズム」（望田幸男編『近代日本とドイツ—比較と関係の歴史学』ミネルヴァ書房、2007年所収）；加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人—洋行知識人の反帝ネットワーク』岩波書店、2008年；中山信子『「十字路」の1929年パリでの評価—当時の新聞・雑誌の批評の検証とその評価の背景を探る』『演劇研究』35、2011年；太田丈太郎『「ロシア・モダニズム」を生きる—日本とロシア、コトバとヒトのネットワーク』成文社、2014年；岩本憲児編『日本映画の海外進出—文化戦略の歴史』森話社、2015年。
10. 衣笠貞之助『わが映画の青春』、116頁。
11. 同上、113頁。
12. 同上、123頁。
13. 同上、124頁。
14. 木村毅編『明治戦争文学集』筑摩書房、1969年；内田百閒『間抜けの實在に関する文献』福武書店、1990年；相澤啓一「美的なナショナリズムの＜魅力＞」『文藝言語研究・文藝篇』38、2000年；桶谷秀昭『保田與重郎』新潮社、1983年；佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』春秋社、1995年；福田和也『保田与重郎と昭和の御代』文藝春秋、1996年；桶谷秀昭『浪漫的滑走—保田與重郎と近代日本』新潮社、1997年；橋川文三『日本浪漫派批判序説』講談社、1998年；ケヴィン・マイケル・ドーク、小林宜子訳『日本浪漫派とナショナリズム』柏書房、1999年；高田里恵子『文学部をめぐる病い—教養主義・ナチス・旧制高校』松籟社、2001年；辻朋季「上田萬年との翻訳論争（1895年）に見るカール・フローレンツの西洋中心主義」『筑波大学人文社会科学現代理語・現代文化専攻・論叢』3、2009年；辻朋季「カール・フローレンツの初期日本研究をめぐって」『Rhodus: Zeitschrift für Germanistik』25、2009年；辻朋季「カール・フローレンツの日本研究とその系譜—異文化賞賛に潜む支配の構図」『ドイツ研究』43、2009年；高田里恵子『失われたものを数えて—書物愛憎』河出書房新社、2011年；里村和秋『近代ドイツ文学の成立をめぐる諸問題—ドイツ・ロマ

- ン主義の役割とその影響について』『成蹊法学』88, 2018年; 馬場大介『近代日本文学史記述のハイブリッドな起源—カール・フローレンツ『日本文学史』における日独の学術文化接触』三元社、2020年; Karl Florenz, *Deutschland und Japan: 30. Oktober 1914 (Deutsche Vorträge Hamburgischer Professoren, 6)*, Hamburg 1914; Herbert Worm, *War Karl Florenz ein Verehrer Adolf Hitlers?: Eine deutsche Preisverleihung in Tōkyō*, in: *Nachrichten der deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (NOAG)*, 144, 1988.
15. 福田和也『保田與重郎と昭和の御代』、137頁。
 16. 重久篤太郎「ケッペン異聞」『紀州文化研究』3、1937年; 大島浩「紀州藩お雇い教師カール・ケッペン軍曹」『蘭学資料研究会報告』284、1974年; 阪上義和「カール・ケッペン雇用の経緯」『和歌山県史研究』3、1975年; 梅溪昇「和歌山藩お雇いドイツ人に関するドイツ側伝記資料とその研究の近情について」『和歌山県史研究』12、1985年; 石川光庸、B・ノイマン訳「カール・ケッペン和歌山日記」『和歌山市立博物館研究紀要』5~6、1990~1991年; 石川光庸訳「和歌山藩軍事教官カール・ケッペン回想録」『和歌山市立博物館研究紀要』7、1992年; 梅溪昇「新出のカール・ケッペンの『日記』および『回想録』について」『和歌山市立博物館研究紀要』8、1993年; 山田千秋『日本軍制の起源とドイツ—カール・ケッペンと徴兵制および普仏戦争』原書房、1996年; 荒木康彦『近代日独交渉史研究序説—最初のドイツ大学日本人学生馬島濟治とカール・レーマン』雄松堂出版、2003年; Margaret Mehl, *Carl Köppen und sein Wirken als Militärinstrukteur für das Fürstentum Kii-Wakayama, 1869-1872*, Bonn 1987.
 17. 南紀徳川史刊行会編・出版『南紀徳川史』第13冊、1930年、252~253頁。
 18. 巖谷小波『洋行土産』下巻、博文館、1903年; 巖谷小波『私の今昔物語』早稲田大学出版部、1928年; 植田敏郎『巖谷小波とドイツ文学—「お伽噺」の源』大日本図書、1991年; 新田義之「ベルリンの巖谷小波」『外国語科研究紀要』42-1、1994年; 桑原三郎監修『巖谷小波日記(自明治二十年至明治二十七年)—翻刻と研究』慶應義塾大学出版会、1998年; フリートリッヒ・S・クラウス、安田一郎訳『日本人の性生活』青土社、2000年; 小林富士雄『明治のロマン 松野礪と松野クララ—林学・幼稚園教育事始め』大空社、2010年; Iwaya Suyewo, *Nanshoku: Päderastie in Japan*, in: *Jahrbuch für sexuelle Zwischenstufen*, 4, 1902; Volkmar Sigusch, *Geschichte der Sexualwissenschaft*, Frankfurt a. M./New York 2008.
 19. フレーベル教育や松野クララについては、小原淳「北海道」II(5)を参照。
 20. 巖谷小波「少年文学身上話」『文章世界』1906年7月15日号、15頁。
 21. 獨逸学協会学校とミヒャエリスについては、小原淳「関東北部」II(8)を参照。
 22. 巖谷小波『洋行土産』、66頁。
 23. 出口勇藏「ハウスホーファーの東亞文化政策」『東亞経済論叢』1-3、1941年; 横塚祥隆「アルブレヒト・ハウスホーファ『モアビート・ソネット集』管見」『ヨーロッパ文化研究』13、1994年; 村上次男「日本地政学の末路」『空間・社会・地理思想』4、1999年; シュテファン・ツヴァイク、原田義人訳『昨日の世界』1・2、みすず書房、1999年; クリスティアン・W・シュパング、中田潤訳「日独関係におけるカール・ハウスホーファーの学説と人脈 1909-1945」『現代史研究』46、2000年; クリスティアン・W・シュパング、石井素介訳「カール・ハウスホーファーと日本の地政学—第一次世界大戦後の日独関係の中でハウスホーファーのもつ意義について」『空間・社会・地理思想』6、2001年; クリスティアン・W・シュパング、高木彰彦訳「カール・ハウスホーファーとドイツの地政学」『空間・社会・地理思想』22、2019年; Karl Haushofer, *Dai Nihon: Betrachtungen über Groß-Japans Wehrkraft, Weltstellung und Zukunft*, Berlin 1913; Karl Haushofer, *Geopolitik des Pazifischen Ozeans: Studien über die Wechselbeziehungen zwischen Geographie und Geschichte*, Berlin-Grunewald 1924; Heike Wolter, "Volk ohne Raum": *Lebensraumvorstellungen im geopolitischen, literarischen und politischen Diskurs der Weimarer Republik: eine Untersuchung auf der Basis von Fallstudien zu Leben und Werk Karl Haushofers, Hans Grimms und Adolf Hitlers*, Münster 2003; Ingo Haar, Michael Fahlbusch (Hg.), *Handbuch der völkischen Wissenschaften: Personen*,

- Institutionen, Forschungsprogramme, Stiftungen*, München 2008; Christian W. Spang, *Karl Haushofer und Japan: die Rezeption seiner geopolitischen Theorien in der deutschen und japanischen Politik*, München 2013; Hans-Joachim Bieber, *SS und Samurai: Deutsch-japanische Kulturbeziehungen 1933-1945*, München 2014.
24. Albrecht Haushofer, *Moabiter Sonette*, 6. Aufl., München 2012.
 25. ハイน์リヒ・v・アインジューデル、加瀬俊一訳『ひとたびは赤旗のもとに』法政大学出版局、1945年；後藤敏雄『シベリア、ウクライナ私の捕虜記』国書刊行会、1985年；阿部軍治『シベリア強制抑留の実態—日ソ両国資料からの検証』彩流社、2005年；富田武「日本人・ドイツ人捕虜のソ連抑留—比較から分かること」『ユーラシア研究』54、2016年；宮田武『シベリア抑留—スターリン独裁下、「収容所群島」の実像』中央公論新社、2016年；フセヴォロドフ・ウラジーミル/小林昭菜訳「ソ連におけるドイツ人捕虜 1941～58年—歴史とその記憶」『軍事史学』53-3、2017年；Richard Daehler, *Die japanischen und die deutschen Kriegsgefangenen in der Sowjetunion 1945-1956: Vergleich von Erlebnisberichten*, Zürich 2007.
 26. 後藤敏雄『シベリア、ウクライナ私の捕虜記』、136頁。
 27. 同上、138、145、148頁。
 28. 同上、170頁。
 29. 同上、177、178頁。
 30. 小原淳「関東南部」II (4) を参照。